

Kodak
LICENSED PRODUCT
Black

© The Tiffen Company, 2000

KODAK Color Control Patches

Centimetres

Blue

Cyan

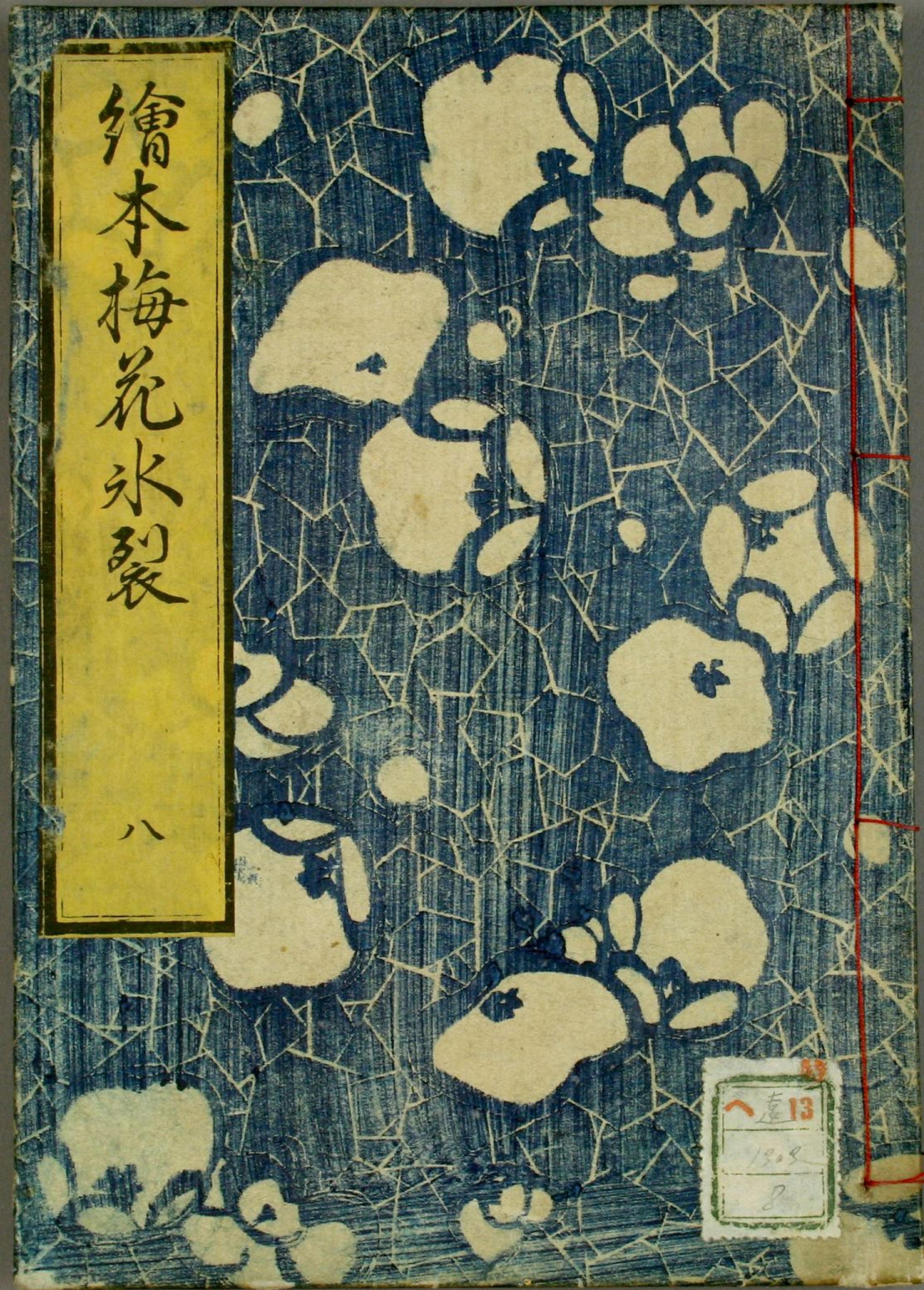
Yellow

Red

Magenta

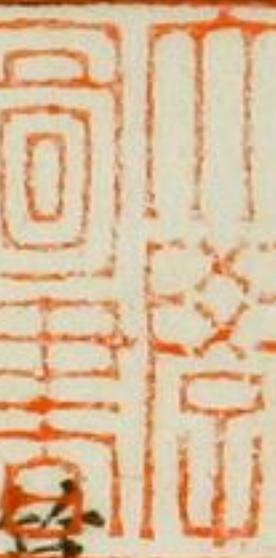
White

3/Color



• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 1 2 3
JAPAN TRAMPA

梅之與異衛
梅花春水卷之二



第十三齣

明誠心謙主

東都 南仙笑楚満人編述

爰ふ亦與四豪傷ハ如何ふぞして鎬藤四郎の刀を絶美仕事一
ふハ歎慕袁文太が行坐と探り而んや人立多き所を能回る一
刀を對せ一者と刃立ち時ハ喧嘩を仕うけて怒を起させ刀を拔すも
てそよと段あ見べ自らかくすりやあらひと箇さくは俠客とうり響
鳥よ蘇ふ一_トは達夜ね蓑を着一又りておう故すれ、蒙まつは蓑ます
預巾よじきよ寝をもう一たちを冠むかり、長ひだ二腰こしと携なく、日毎まいよ鳥とりの
曲輪まきを援あけ、都まぐくは頃ときの戦國せんごくの遺風ゆふうとく、侠客けきといひゆの许あ

多あるがるふ深見園と呼ぶ退糧あり。は祥八皆、探掘の毛を
多く大小の柄と巻くるを帶せり。是ものうちの送りさうぶあらうべ
さまが世の人をして探掘柄と卓犖せり。今も尚存の園の雜劇よ
白柄組とさうべ探掘柄を接訛するまくらん。彼の開化と奈何す
者ぞとらふよ。誠へ彼のよ西鷹龍次郎ホガスア六。俱不哉天の敵す
曰きを蓑文太うり日外待乳山の林葦あく不意うとも失うる高藤ヨ筋の刃
を得く。大よ怪び已が差料とみて常に帶へ。又彼の休姿寝とも
肌身放す。持けるある其後の後へて葦の毛を拂ホガス繩も障化
まる。かうけま金銀のあつふまくせに日毎ス廓へ入つて込ま
き。下の小城等とば義牙と号へて、鬼連三社邊せぬ」と麻法ふまそ

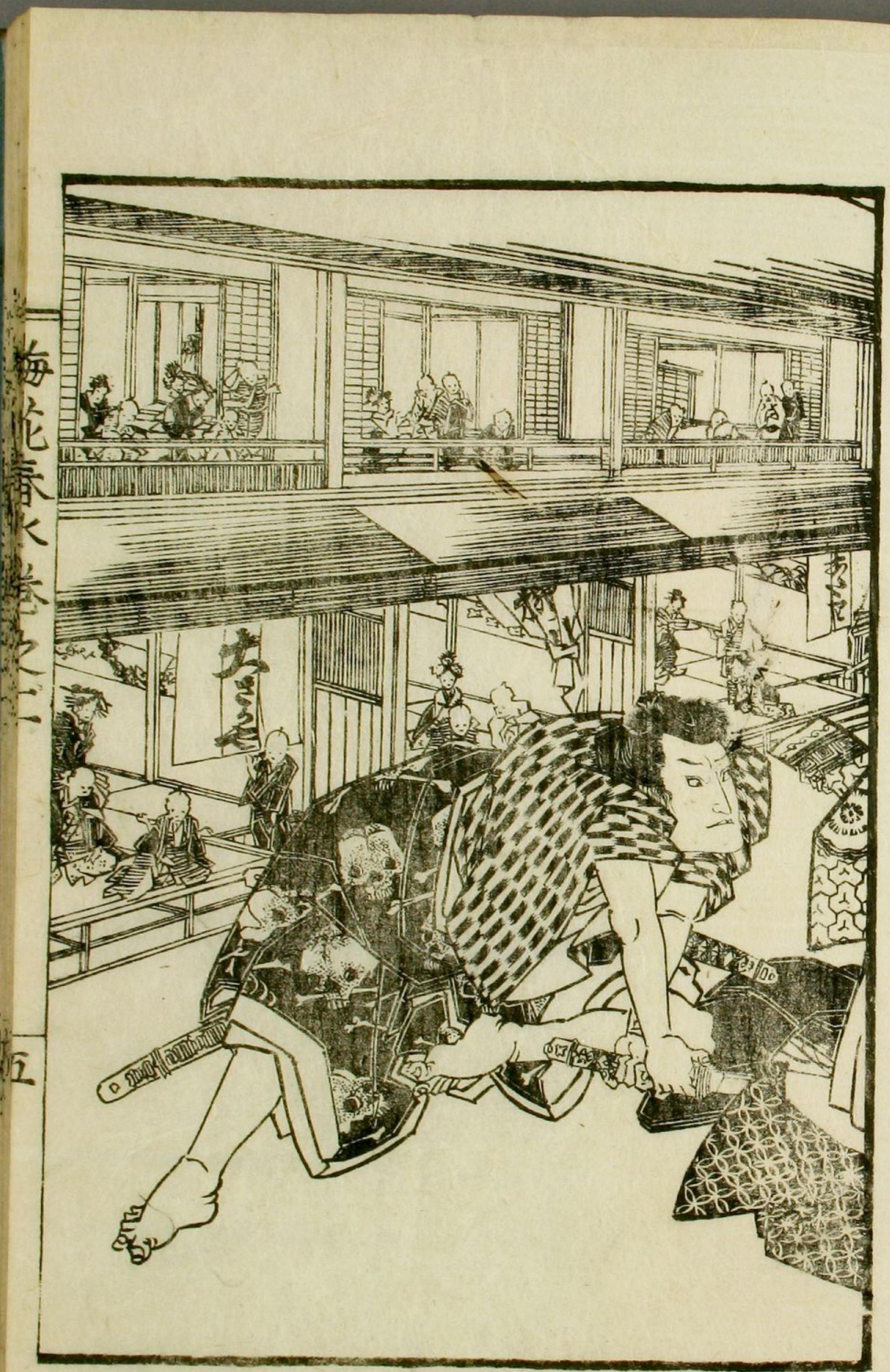
肩脣を怒って僕行せらるども。真お物の美括うるに腰とて维
有てらふじるくまく。階道と襷とて通けま。肱我意まく。金銀
と馬へたらと因ふてうる時。解と宣曉と緋よせく。腰のひのを
奪ひそり無法。すれども。鄭き。債若毎人の振舞えうりける宿。よ廟中の
者ひひす。更の。探掘柄組と。腰と。丘彈。と。忌媛。ざる者。すう
アサ。よりく。よ四三房。が群。の強。を。下。き。弱。と。助。け。も。う。仁
義と。同。と。ま。う。犯。ふ。人。呼。ぐ。に。義。組。と。す。称。け。る。すま。が。よ。四三房。と
國。の。直。よ。を。制。きて。画。と。金。と。と。り。す。神。う。く。ぬ。方。の。敵。と。む。ね
ば。仇。ふ。る。お。じ。す。因。ひ。が。振。舞。何。と。ゆ。く。心。勝。ぐ。の。だ。ま。か。う。け。ま。と。ま
せ。ま。く。お。じ。と。せ。く。探。り。け。る。案。下。基。生。再。免。唐。琴。ア。寵。次。郎。暫。く。常

度より房總の間を探しけり。森たうづまきがつと邊りにけれ
ば一度寺田彦房は逢ひて相交ひて其上ふく京築城す。探し
をやと取て返してける旅中。袖々不圖病ひよかうと行歩す。自由の
ざきとけよ。先葛飾の源義房が方へつゝにて。邊り辭す。養生
主。其身は寺田彦房が方へ來りて暫く爰よどぎの名守
權ハと改めく。身びくよ養文太が行進を餘美る。けふがおき者の
身もひとへ不圖彼の出来と別際。原束山紫の權ハがお六家
謙筋へり。猪の足を悉くもあら振よ送す。贈うず。勤むる主
をき。因心もよし。あぐさ香よ迷ひ。三浦姫が許よ通じども
のうも因心よ。號曰吉房。ひらくつるる意地。彼の御事の女

ねみて百夜ともと通ひ。折りも秋の景中。そ。廓ハ側
の俄羅ノ物と催せ。と。其服ひの火をもく。哥伎封印。同
わの趣向。お臂青官房。奉腹。且感。と。因變ひ。勤搖。と。折
から。それ喧嘩。とりよ程こそ。向。五季集の人々東西尔走り。
南山を遠ひ。上を下へと移だなじく。右往左往。散乱
する。更。役楊柳柄劍の邊。至りのども。毛うれ美少。年。の胸
ぐらえ。捕へ立。ある。よぞゆ年。ハ。一向。よきをまく。従ふと
ぞ。原本無頼の華。されば。再。よも。かげに。黒に。同。青。よ。罵。れ
やう。折。我。を。奈。何。う。者。とう。や。汝。ハ。此。里。來。官。事。へ。す
要。児。よ。や。豫。く。き。み。の。み。と。呼。み。も。聞。つ。ん。役楊柳柄劍の用

心が美第の者う。又五六段も二腰をたまどら六武士うち。などく我ふが腰刀のこよと汝う刀の巻うるよ。腰刀もゆく行らるハ、あれ至極宜う。甚厚によへ教へ殺し。魁首園心殿の面前まく引ひく。魁首の差番は仰ほと。きどう是ぢやのひく被ふと。憂念ふぐ多勢に参勢。詮方ろくそ乃ゆる折り。又四岳東例も曲勝へりぬむ。何心く來かくに。宣傳とゆく御ハ又例の棕櫚柄綱の業うさん。と群集せき押多くとされ置けら。權八が園心の業うさん。と群集せき刃をれ。走りあて權八が御を取る漢の小腕捨あげ停に僅と。腰材三ハ残の奴も。拔連く切て御の成縁なせだ。刀ひだ取散を打殺せば。

權八を後よ興ひ立てる。地蔵とぞ見へよける。這時因り。揚菴の樓上。酒ぬく。あ。御うけも。が。と。波う飛ぐ。あり物を。言ひ。奈四三房。よそとうるに。ひる。すと。丁ど。と。物を。誰へ。ふと。興へ。き。あらつゞぎ。うら。識く。棕櫚柄綱の魁首と。や。因ひ。と。ぞ。見う。何を。ゑかる。狼籍。と。言ふ。母も。あ。め。聞い。呵く。と。冷笑い。汝の。奈四三房と。や。ん。緋名。あ。白痴。よ。素町への。分際。わ。我輩と。同。く。侠客。うえ。が。と。う。社。いと。う。最。片。腹。い。じ。と。折。す。有。ら。バ。一。刀。の。下。よ。家。か。の。鬼。と。う。ま。と。思。ひ。よ。時。そ。ま。ま。う。童の。我。う。子。分。の。者。へ。對。一。不。れ。と。を。そ。り。の。ま。え。ま。と。う。も。と。言。懲。折。盤。う。る。を。吹。き。我。美。ま。お。と。鄭。教。ら。童。が。肩。お。ち。お。持。頬。ま。う。と。そ。可。矣。け。ま。う。と。梅。の。幹。り。う。と。我。一。刀。み。落。花。赤。垂。



うきとべりと。りと。湾うふ。罵うとうへ。元めやすたまもく。切ひむむぞ。う四
さく。ひいゆつく。ももまよ。きくどう。ひいゆ
さく。ひいゆつく。ももまよ。きくどう。ひいゆ
から三浦の山第六は換子を先があくせよ。ひも
来く。足。因ひと。う四。湾が。ひも。練と。ひも。凍の太刀先をう。ひの出る
まで。四。湾が。夏の。山。雜戸ホ。只あきれみあきまく。塗方う。塗
も寄りぬす。各種の切木を携へつ。遠巻ちとぞ。リ物を。山家へ。這
体を。見。さう。已が。暑く。行ける。禍禍と。も。迷て。脱く。合へる。二人
白刃へ。ふたと。あうけ。我身と。うせよ。剪ひ。まご。さす。づの。兩人。塗方う。頬
見合て。下よ。重く。刀と。刀。の。胸。も。湾と。あ。ば。場の。宜義。も。四。湾
縛。縛。ま。其の。退す。人。山家を。見て。する。因。後。左。言。の。波。此
猶も。賣。立。勵。

女が。抑。蜀を。幸ひ。は。終。又。ち。留。ゆ。比。自。と。迷。上。う。傷。負。せ。ふ。奈
何。く。と。罵。る。お。ぞ。と。四。湾。そ。り。き。立。上。と。欲。ま。き。が。す。小。花。火。火。を
や。や。腊。生。ぐ。白。み。の。上。よ。膝。と。あ。げ。ば。其。身。よ。過。ち。あ。ら。ん。夏。を。み。ま。至。よ
舌。戦。き。る。の。み。あ。て。さ。す。が。白。刃。を。い。島。と。暫。時。躊。躇。あ。つ。さ。紫
色。遺。恨。あ。う。ふ。も。あ。く。す。喧。囂。の。表。裏。と。か。ら。ん。意。蓋。の。こと。と。
あ。く。て。う。金。を。失。ふ。を。使。客。と。も。ひ。あ。ひ。と。そ。り。て。り。う。き。年。ね。く。ば。場。の
候。ハ。妻。ふ。額。け。く。う。最。他。げ。う。に。業。う。ま。ど。古。二。石。圓。う。だ。日。比
よ。う。一。ト。う。う。も。因。の。古。方。う。量。が。其。身。の。有。い。変。と。舞。ま。く。不。う。
あ。き。ふ。あ。忘。え。う。が。も。失。ふ。せ。る。う。と。う。ま。ま。き。が。ど。う。じ。う。モ。

原東強く勝負と好まぬ。四三房因ともお角の山本が泡舞下
かすかく。ト。一旦放て。うば力血を口す。と。虚く
きあへ我黨のせざる所をと。白刃の下よきと清ま。と。め
氣性を山本。回め。と。今日の喧嘩。おもめぐれを真にひらげ
をあく立候らん。男と男の仁義。今よきと。直り。又折
こそ有ら。ら。と。言ひ。力をひそと。す。四三房は。目を殺して
焼み。金うちす。と。豫く。身も。倘や。高麗四郎とよへり。と。する。と
す。拂ひ退け。武士の帶ひ。魏と町人。閑情の。と。四三房が。むさへ。殺す
と。身。部をうけ。へひと失礼。う。壁を。と。あやと。あらへ。瑠璃と。み
た。そと。鳥羽。ハ。け。と。風を。と。國を。と。そく。と。子分を引

連星草は。は。心を。か。と。ち。山本は。お睨ひ。りつひの。見。因の。邊
妻が。宿。よ。い。ぶ。の。緯。故。と。て。還。へ。い。ひ。も。と。り。バ。よ。四三房
彼を。否。と。ま。別。は。深。き。子。細。と。有。ら。ん。何。と。と。あ。且。這ふ。は。眼
取ら。悪。へ。と。見。山本は。と。遠。へ。の。權。ハ。君。み。は。一。や。上。の。御
あ。と。山本と。返。へ。と。四三房ハ。双。眼。は。涙。を。浮。り。權。ハ。よ。向。ひ。憲。あ
た。六。晴。付。齊。よ。と。冠。か。と。と。小。串。の。長。弓。唐。琴。浦。右。門。様。の。鑒
統。總。大。將。と。見。と。あ。と。山。方。の。山。内。流。河。元。敵。を。征。う。付。ハ。蔓
寐。字。を。極。み。た。と。見。へ。り。行。の。百。物。あ。戀。の。難。羅。辛。苦。と。通。て。敵
よ。うち。あ。す。改。る。名。と。序。角。よ。と。ど。め。と。後。事。の。美。徳。と。す。そ。と。よ。荷。が
あ。ゆ。い。よ。山。家。よ。は。根。を。奪。る。と。が。の。よ。子。四。三。房。の。す。虚。而。一。度。

夜とひ日と通ひぬ。身の邊あらへての因縁の外
そぞりひさうら。そぞりかまつもよるべからんと足若浦古事記の歌
文太とおきと後藤の正義とそぞりせ唐琴の庄家と再
興せす。忠率全武士とやせじまほ。這子四三房が父數多の
をわく敵栗野十郎左衛門全く人達ふく殺せ。先達く我
方へ來り自殺きての物語。まふつきて女房山海が母の長吉も不
隨ふ。我よりはくあく見最易鬼まれ角まれ恨重く巻文が
憶す。我よりはくあく見最易鬼まれ角まれ恨重く巻文が
行盡を捨て。且猪益四郎を奪ね難きがと因ふる。不國界
をくら候客。いふもむだがれの拙者が持日毎み花街と徘徊
て。かどじと。ひどく。その。おもて。男達へ氣をひくとくよる。其つらは我より是うき。但達

夜の寝るは則我が本腰。着るはの寝るとして。入数右門が宿題を
宿題する。我ひて示こ爲とせしるは爲ハ反哺の孝ありこそ。諸
てのふよまづり。一疊ある。暫時。あり。忠率。こす。との
飛び衣振の模様ふ深みて。お夕着るは。ひづ。我身と日。は省
た。曾子の教。ふ。ひづ。早く。人よ目。よ。豈。み衣。表。の。存。達。模。様。
忠と孝との賜の。ひ。がみ。の。上。底。深。又。ひ。づ。お。の。縁。す。ゆき。近
巾。上。よ。ま。な。び。ぬ。表。の。表。の。表。の。古。の
ひ。と。く。頃。よ。近。と。ま。よ。る。上。よ。み。の。表。同。前。借。達。ま。と。お
ろ。せ。へ。ひ。よ。神。ひ。せ。ま。の。る。何。が。う。忠。義。よ。う。う。と。ひ。と。彼。の
古。語。や。め。ら。る。と。く。鮑。魚。の。肆。入。る。者。ハ。其。臭。と。高。く。こ。や。ら。かる。

在里へへてころが。倘やもよなみを失ふと。大変おちる。莫のや。と。
身ふくらましもうす。勢の疫鬼角へりもぐり。復立怒る莫
す。そことぎて。辛抱して。こゝへゆが。僅の身。あはれのうき跡
進する。うへぬ筋史もうが。疫鬼と。ほ二教の意をひく。頃ゆえ
度とあうして。さうじよとや。ひきへ。古年あゆの店ひよて。おぼ
かひよ。まよ
山鬼の戯のよ。すもあさきて。が。全く。ほ我風流の物教。お真
ふあうす。かよひと。尽。す。四。疫。鬼。が。心中を推量。あつ。ほ。草。は。お
ま。こ。むら。鬼。れ。と。通ひ。よ。ば。せ。づ。く。す。ほ。よ。疫。が。因。ひ。山。鬼。よ。疫。
身。り。山。鬼。が。許。く。通ひ。よ。ば。せ。づ。く。す。ほ。よ。疫。が。因。ひ。山。鬼。よ。疫。
抱。く。て。う。そ。と。山。鬼。が。又。君。よ。情。よ。そ。と。と。渠。が。よ。順。が。よ。と。と。疫
抱。く。て。う。そ。と。山。鬼。が。又。君。よ。情。よ。そ。と。と。渠。が。よ。順。が。よ。と。と。疫
よ。と。最。前。の。て。く。因。ひ。が。す。ふ。あ。か。と。捕。へ。と。狼。藉。じ。う。と。覺。へ

たうと。且。渠。う。被。ま。る。か。ハ。高。着。四。郎。と。ゆ。く。ゆ。く。と。思。て。も。渠
も。う。き。ま。る。か。は。怪。よ。そ。と。生。め。う。た。ゆ。え。辻。個。と。達。め。う。き。渠。小
渠。方。へ。う。よ。と。あ。と。六。是。幸。ひ。小。渠。よ。言。ふ。く。ち。く。密。よ。刀。の。実。高
士。た。さ。と。自。ら。歌。の。よ。う。と。ひ。う。度。も。あ。く。ん。う。け。ほ。く。い。と。改。め
る。よ。し。く。あ。ら。出。等。と。と。う。き。よ。う。と。だ。も。失。す。あ。る。よ。四。疫。う。弊
る。異。見。よ。確。ハ。何。と。應。ん。よ。う。も。う。居。こ。す。よ。渠
ら。く。あ。つ。く。と。四。疫。湯。よ。向。り。傍。經。過。て。う。か。歌。待。身。と。ち。く。と
六。あ。つ。く。と。七。繁。ふ。清。ふ。ら。ゆ。ふ。よ。わ。く。に。經。う。う。と。通。ひ
矣。今。更。因。へ。お。う。ら。症。す。や。か。く。花。街。へ。ま。ち。り。ま。く
危。邦。よ。入。ら。す。乱。邦。よ。居。ら。す。う。の。聖。人。の。經。留。一。う。宿。す。高。野。せ

をもくやしけど。さうふても困ひとゆらへ。帝せし刀を高麗四郎を
ひきや。尋る。蓑文太夫あくする。彼の蓑文太夫は世よすまつた者
と便つて、因ひ入兵骨柄。その刀ハアリ。後よしくひと付
さくまで。とくへハ子四郎。おとび作とすりへ。おとすやうす如く
拙者。乃お持ては難へり。とむす全くそきのまゝ。ぬかと油
あえ。往來の人よまと。ひとつけとさうへや。すこ貴君よまば
由を出でよ出あつく。困ひ。主と刀とと途義を。すくに
らえて。へ立繋き。不ふく審終せ。ハ禍ひの端より。りそる。陽家
ゆく。尚委へく物語つと。ひとく。其日ハ權ハせ説ひもつづけ。

第十四回 契比翼死節

過改力岸と權ハ子四郎が実ある。諫と守り其後ハ小室出征す
屢々ハ徑どりて歸る。少室ハ權ハを喜慕ひ。日毎又文士
勝つて。其要否を紛ひ送り。是を聞耳り。かうじ
け。程よ困ひ。まほ權ハ花街へあぐらと深く隠ひ。且く三浦岸
かうじく。是非ひよあく。せとものと合恨。湯水の如く。まき散ら
ちく。種々の風流のねじよ。月、一け日。雜戸木ハ岡山へ来る。毎よ
三晩佛の庄来途とて。あがめ歌妓幫同ハ只深凡大辱とて。あ
あ。下で。山東ハ猶す。因ひがむよ。がむ。後よ。すまつて笑の情を
ゆ。かず。とりども。意地強き。深と。ぶつのつゝ。身を購ひ。宿の
花と。うだらだらと。けつと。三浦のまく。相続の。うびけるわざ。小

案の事を聞く大に驚き、又病氣と偽りとてらへ引ひりてお
外へけよ。主人は屏へ假りて病氣す。あやし案が内にあまち
あくえ更に鬼角病の保養あるとて幸ひ玉川の
邊り風景より免所より別業の在りけよ。暫くが間、少安と安まね
新造充立けおなぐ其全狀を待て、困ひ方へ傍らてと言延け
ハ圓かず詮御る。おほまこと彼の玉川の別業へ入る事と山案
い難處へて心へて假すよせつて。りづむとじへと三飯、
かて山案へばあよ様にまよへて目もあがめざめ。子四萬
兎を使ひてよ四萬が許へ權へと達の文と携うてじよ。子四萬
案内より案が方より縉アヒテ玉章を圓き園から辭ひ玉川堤
の別業ぢくおミトヨシ。最幽よ琴の音の妙ふるふぞ。權へ因ひて
耳をそびてあり尼寺の性は山案うさん。あくづ曲ハ想ま爲備ハ
數々の這權ハをかく返す高葉の根を虛よ因ひてあくづ
手四萬房主辱が諒ある。詞ひごとげては冠あらく音器ぬる根
て偽りて文章水莖の跡もさとびづれ拙りす。おとひ容とり
類ひまする山案父源房も元來ハ由緒ある武士の果と眞

中。積の物語とくまとそのうすよ權ハもあまき仕度調へ。幸と共
併すゆく去らぬ。山案ハ離妓と權ハ并つゝ。跡あく尼寺の扇り縉
案琴とくとく想ま矣の曲と權持して居るわから權ハハ離妓が
ある。あらぎたと
案内より案が方より縉アヒテ玉章を圓き園から辭ひ玉川堤
の別業ぢくおミトヨシ。最幽よ琴の音の妙ふるふぞ。權へ因ひて
耳をそびてあり尼寺の性は山案うさん。あくづ曲ハ想ま爲備ハ
數々の這權ハをかく返す高葉の根を虛よ因ひてあくづ
手四萬房主辱が諒ある。詞ひごとげては冠あらく音器ぬる根
て偽りて文章水莖の跡もさとびづれ拙りす。おとひ容とり
類ひまする山案父源房も元來ハ由緒ある武士の果と眞

袖外が物語をまよつけても人間の榮枯浮沈などちあきのいあら
す。誠や行河の流を経ててありも元の水は非ざと故人の歎ひより
宣う。歎持方ハ移更よ望まむをまよはば身の上もううた夢の浮世者と
行末哉方を思ひづけ。水の面をお絃め阮瀬日夜東流去て愁人のる
み暫くも止まらずりう詩も思ひ知くまが一河意よナハ。それとハ
きく離愁のたう。權ハ袖をひく花魁のことを待院て居る。さき
よ速歩きと。いそゞ立ち處立、あらわすもの別荘の庭
へふきバ小紫ハニキと見ゆ。琴うぐいすと權ハよ向ひうごどとは權
のうきくくよう。うきくよき。うきくよき。うきくよき。うきくよき。
ハ遂く妾安か許へまよひなハ外よ増花の出来もやあつる最恨しき
意也とおうとつよ權ハも詮方より脊とスラでさす。全左あら。

豫て皆差同心の跡をもすび一往來りて見る捨て更あらんや廢水
火の中うりこも。憶れひて目を落本意を遂本国へ立候。由才も苦悞
をもよまく。身怪ふう今い憂苦を昔給よまへ。すまよつきてす
ひ間うう度く文を言ふり。如く先達く聞ひ。子四三席と曲輪を
喧嘩のお柄技放せ。刀ハ正しく我くが辱も。萬藤四郎又仰て申
と發く渠が主性と刀の美否をたゞせよと言付をき。と立局下
かりよ。出家し。くりかず國ハ不珍帶する刀ハ殊の大切の心にて片
時も傍とす。まよさ。まよさ。まよさ。まよさ。まよさ。まよさ。まよ
を訊問。どよ大夏の物ういとのみ。あく子細を語らず定らし。詠きと
の直す。まよさ。まよさ。まよさ。まよさ。まよさ。まよさ。まよさ。まよ

とお持うちとや倘き瓊の裏の梅の花の形を繕ひておもぎるやう
ふす宣の瓊。瓊の裏の梅を尋ねたり如何よして夫をあむふくま
いづくまへま瓊とぞ我が国を發宣まつて御り瓊うつ揚げて水密達
ス疑ひゆ。彼品ハ先達く房総の間を吟行折ら。とある道旅を
賊のみ小奪ひとらま。其盜の落散くうへは行參うつ恩つよ是
正しく盜賊が同類を集う割參うつてあるまう所彼の國へ強
盜の首領あらう。わすまが於く高藤四郎も盗が盗みく不持
草もたまら。じきて國へは耳へなまくひや小策日ひくふも折
來主じざる難。強固官侍がらも不典主をて立候。侍主が只今
やも足ひのへを遣へがおまえ既へでもうて更に目前のひ言

然らば速文士廻らく嘆びませ。酒宴を催すて教言を以くまし不知を
そらう。其辭又素ふぐたらおとうぐひ蜜。力と瓊とと奪ひれ。
翁時宣よりらば藝女の方をやすり。世人は耽とうこすと。一種の
宝をひると。且六國のうちや蓑文太ふくあらとふハ多年の本意
とげとも偏よ汝が動く五口爰あくばむ。十方よ計ごうべ。
一トまう。四箇所が方へ立庚。後刻子四箇所共假寐よせびあらと。
其寒きとさくら。何とりふす我く蓑文太グ面をあらざれば迂凋
又事ハ才くらひ教へ。我よところをひきまで大丈を謬うとす。と最も
かふ教へまと。四箇所が方へどうと取へぬかうとけ。程よ少くへふ速
文をあくらみ。文をあくらみと使くとて國の方へ勝りけ玉。國の何事ふと

開き開いた。今日ハ如鍾すと一漬くしけまば。久くふく一盃を傾く
積もぬあ倍ひて。徳らんうま。今より玉川の別荘まで駕を往げ
まへん。夏とこひねだ。ひよみうに山案がいと媚くる文章るき。不審
きづらゆべへ姉。あはき。仕度細々。別の莊へ来くよ。山案六組
よう。ひよみう。一倍精ひそらへ。美酒佳肴を風流の器。盛つて所移きと
おきる。客待類。獨り。不空と舉く。未だ。故とせらせ。微醉さげ
ふく。固かよむ。ひよみう。ハ珍きる物。もとぞらね。厚と徒驚る
まよ。途へまよ。せ。よ。まよ。そぞれハ遅く來す。ハ妾。よ待。繩させ。ま
を。お。おやいと。強面と。卿。ふぞ。開かハ。忽魂天外。よ。飛んで。恍惚と。そ
ひ中。酔う。如く。答へよ。を。あ。只。唯。と。て。座よつけ。山案ハ
ひ中。酔う。如く。答へよ。を。あ。只。唯。と。て。座よつけ。山案ハ

又盃を举く。開ひよ。を。む。開ひよ。り。よ。た。小案が。お解く。よ。か
嫁。く。因縁を。數盃を。う。む。くる。小繫。原案。ひ。物。の。よ。バ。一向
婿た。娘を。出。て。開。を。能。み。う。め。ら。志。近。よ。酒。を。す。む。宿。よ。家。六
本。きよ。宿。町。て。十二分の。辞。を。處。く。小紫。よ。ひ。某。さ。う。ひ。う。履
き。身。が。許。へ。通。く。ど。す。は。男。ハ。り。つ。も。強。面。耳。堂。侍。く。竟。よ。霞。の。枕。を
か。き。さ。ひ。と。り。よ。す。男。の。意。義。地。う。ま。近。く。病。の。む。じ。る。を。待。く。三浦
屋。の。主。公。す。む。篠。く。終。令。く。も。き。た。ま。バ。遠。く。す。は。男。を。購。ひ。く。我。が
宿。の。お。と。き。る。お。る。ま。が。最。早。里。の。意。氣。地。す。す。并。く。今。す。控。席。を
こ。す。よ。して。我。望。を。か。る。く。る。よ。と。腰。よ。り。よ。と。か。き。口。渡。ふ。小案
微。笑。よ。う。是。よ。で。強。面。の。み。わ。て。よ。と。ま。よ。せ。く。昇。る。常。の。く。き。ら。ぬ。五
ひ。あ。ま。

身の更生へあまが。只一時の戯れもバ却く思ひの牛する種うれ。誠實のまの徳りよくす。其時こそ人生涯を生まし生む。然こもみよきとぞ。づくのみ云ふともいひのほど。行多の黄金をかきて妻うゑと贋ひゆる赤いよなこたまて。怎麼する由ゆ従ひまらず。去乍ま君の妻がいと疑ひゆ故よ物のとつみ譲り。又ふ最理よりと恨みけむ。因心ハ此想を聽く。斯ううべ最早ま辱す同前も。何度もう陽をとくと應け。小紫曰。あらば今君よ同じまつともう何のよと。言へありや。またおまよ。かね訊まつせ。常よを達せ松彦して。假想を放くべねが何よ。ひづ。猪ハ婦女の暗むかひある。君ニ一世とうござ。まよ。是不審。

示達。生での記念えど。取とく。きらめふ。あらざり。倘やさう。左様の人もあり見え。妻只今君の内ゆきこぶひまのうもる。後竟六月を弃て。必定せり。さる事よあく。すばその境を松彦。さく。猿を祥の語を彼せきりと責問。と聞か。因心ハお笑ひ。伶利。まづら。其境を私巻き。と。左様の事よあく。わど。其子細。今。まふく。説明しげ。後自走くる。人とり。小紫ハ聽く。その子細とかく。よそ。跡りづく。怪しき妻が推量の如く。うづく。そまづく。其境を暫く。口に。頑け。うづく。と。よ。聞ん。詮方うく。誠や女子と小人。ゆうひ。難。とやら。這局ハ大切の物すて。

梅花春冰卷之二



十五



梅花春冰卷之二

十六

序時も初身をたまへて死物もども左近までようこひの間の晩
時^ト間^ト心^トあづけつゝにすべく其うより我もまた豫^トちらくと
見^トかかづる。ゆきの院の入癡^ト擁^ト八妻と聞^トうと消^トして
困^トいと我名を^ト歌^トく夢^トひ^トとりへ。小紫りの妻^ト嫁^トよさるゆめ^ト
そま六君の因^トひ^トふみ^トや有ら^トと^ト忍^トせ^トことを無理^ト休^トす
車^ト一の腕^ト麻^トのうみド^トの毛^トを斑^トの痣^トありけりと見^トう。岡
駿^トとて大^トみ善^トを替^トが間^ト小紫^ト額^トうちまわりて有けりが
歎^トあづく自己^トが左の腕^トをまくとあげくとす。岡^トが鏡^トす。又
小紫^ト同^ト形^トの痣^トありけりが小紫^トお経^トたうがら^ト其^ト縁故^トか
ら^ト仕^ト兵^トとて居^トうける其^ト時^ト岡^ト小紫^トむじ^ト云^ト根^ト其^ト方^トが

実^トの妹^トうり立^トて顔^トアリとあづき^トども。性^トうり禮船^トは院の痣^トうり
あハ原^ト來^ト捨^ト子^トる。實^トの父母^トを^トあくさくハ^ト及^ト理^ト之^ト拵^ト吾^トく^ト父^ト
彼^トの高^ト階^ト師^ト直^ト一^ト族^トよ^ト廣目平次左^トつら^ト武士^トふくちう^ト親^ト祀^ト
君^ト也^ト。二年^ト父^ト行^ト別^ト武庫川^トふく^ト討^ト死^ト。我^トハ^トま時^ト縫^ト四^トあ^トも^トあり
ク。乳母^トが^ト懷^トみ^トごうま^トく^トさる^ト片^ト山^ト里^トへ^ト遯^ト。それより^ト乳母^トが^ト養^ト
育^トふく成長^ト。旧鳥^ト蓑文太^トと^ト姓名^トを改^トり^トそと^ト姿^トみ^トび^トあつ^トが。
人の女子となりぬ^ト。父^ト平^ト左^トう^トも^トう^トの娘^トよ^ト情^トをうけて^ト壇^ト社^ト。
の血脉^トの者^トハ男女^トうき^トず^ト。庶^トの班^トも^ト似^トる^ト痣^トあま^ト。ま^トを^ト证据^ト
ゆ^トて赤^ト名^トあ^トす^トと^ト言^ト。波^トう^トせ^ト。今^トに耳^トの底^トよ残^トり^ト。

汝が嫁よは悪あるべからば。妹よ疑ひゆ。御まが最旱今と語
を表慕ひ。まど妹とあらへらば。支障の交うたまに。姫一はのち
あづく駆のとす。そきよ付く驟く其方と訝あら様子うる。
權八とりふ少年とて我卿頃信州よ漂泊せ。折ら子細みてお景
せん。唐琴浦右門が才ある。彼の子四三歳とほら男子も渠を
世活まる。かくか。ゆきり唐琴の家よ不縁の者ゐるべ。兎てす角ても
生むだれ。枕と高めあがむ奴等あらず。汝兄よ毎日て望み。一
口吹き小紫の申ゆ思ふ。權八吾よ。權八よの歎とねらひ。渠
蓑文太といふのこそ。聞ひて我実の兄あくあづける。何。兵元
悲しやと暫時途方よく。けふ。信とん。骨閑ひよじひ。初て寝て
了。

我が妻の性今うとて。五まづ体の撞う。國ひよ。さる。中筋ある。人の手
う。其は。け。修。朽。木。も。ほ。う。ら。す。兒。貞。い。を。入。乍。大。義。を。企。て。ま。の。宋
の。花。を。抱。あ。て。と。圓。く。バ。二。世。と。言。う。じ。する。權。八。ぬ。一。う。ま。で。え。ま。父。母。の
故。く。う。ま。と。り。よ。も。あ。く。ね。奈。何。よ。も。渠。を。あ。ざ。む。と。て。あ。き。り
兄。上。の。あ。よ。う。く。う。を。と。う。らせ。と。思。ふ。る。き。が。暫。く。左。手。の。帶。く。き。ま
腰。刀。と。朧。と。と。妻。よ。貸。す。ま。う。そ。の。一。手。を。か。う。よ。と。權。八。よ。四。歳
考。す。ち。ひ。き。下。せ。く。あ。ら。え。る。最。易。く。と。悟。る。と。便。く。閑。ひ。ハ。候。待
す。て。大。丈。屋。が。汝。の。ゆ。き。が。我。大。室。の。成。金。せ。て。工。造。す。あり。慶
く。出。る。み。け。ど。く。ま。く。仕。預。す。ま。く。夏。う。き。と。刀。と。朧。と。と。少。年。後
を。岡。公。ハ。立。飯。う。う。み。く。惡。び。か。み。立。戻。正。前。我。の。茂。ミ。離。れ。入。

斯ども事す。かくはる。をがりる。疾。のじひつ。観。何。也。
 とさらへと。御。充。充。ひふ。御。章。を。擁。ハ。君。の。行。持。く。に。ね。
 言。有。く。坐。一。ゆ。自己。ハ。手。假。奥。入。て。夜。暮。うち。う。ぎ。卧。ま。け。
 忽。竟。山。出。あ。ら。善。う。悪。う。赤。糸。と。雅。そ。き。ハ。宿。も。死。擁。ハ。い。手。四。三。房。
 方。へ。ま。遠。り。今。日。の。始。走。を。移。終。日。暮。う。再。び。彼。而。往。く。御。園。が。
 宴。会。と。れ。さ。と。手。四。三。房。と。相。続。して。居。こ。り。け。る。早。當。日。も。暮。昏。
 遊。く。う。る。比。慌。く。小。紫。う。充。又。や。參。と。推。く。ま。う。權。ハ。の。遊。く。
 何。う。よ。花。魁。の。急。び。と。此。み。と。君。よ。寝。て。よ。と。宣。く。御。屋。届。け。
 ま。の。く。せ。と。立。口。捨。て。亦。遠。く。立。飯。う。り。且。權。ハ。子。四。三。房。の。面。字。
 う。く。く。披。園。に。其。文。曰。最。前。君。の。教。み。ま。う。た。因。ひ。と。ヨ。う。な。き。き。

酒。と。處。り。く。心。と。蕩。一。甚。寒。風。と。さ。ぐ。う。だ。ぐ。に。因。ひ。と。世。を。あ。が。
 う。る。の。ま。と。あ。も。ち。ま。か。と。う。ぶ。被。名。緋。の。旧。き。蓑。丈。木。又。疑。ひ。づ。く。萬。若。四。郎。の。力。も。冰。寒。達。く。ゆ。え。
 も。二。高。き。う。所。特。り。下。居。り。が。尚。す。酒。よ。醉。こ。母。お。卧。さ。て。も。見。ひ。る。
 速。く。來。つ。く。年。末。の。本。意。と。ど。け。あ。く。ば。と。書。う。け。ま。權。ハ。
 う。る。手。四。三。房。あ。ハ。天。へ。も。あ。ぐ。ひ。せ。て。義。ぎ。ほ。食。こ。の。く。膳。く。玉。川。
 堤。く。來。く。尺。ま。た。は。時。た。や。日。全。く。暮。き。と。て。堤。よ。ま。と。び。く。虫。の。変。
 寂。く。寥。く。と。て。空。う。き。墨。う。と。て。豫。鶴。と。浮。雲。わ。く。清。光。と。か。く。と。
 風。情。ゑ。む。じ。と。と。ぬ。詠。う。と。と。い。へ。い。更。よ。是。ほ。の。光。景。よ。ひ。ま。つ。す。彼。
 三。浦。岳。が。別。姓。の。外。面。よ。ひ。せ。い。内。の。よ。う。じ。よ。座。ゑ。み。ひ。
 屏。風。と。引。ま。り。て。透。絹。の。燈。と。あ。の。か。く。屏。風。み。う。け。く。正。く。

國の常なる羽織とわがけよ。僧と妻寝せよ。おがへ
たる山紫は何ゆ。ある。困りと漆町へきて居るゆ。猶
まうおひくをあづや。おひすふ庭の切戸を押開て寝よ入り。
猿類よあがり屏風の邊に。邊づまく。是音高く。あめくら。
奈何よ深見國公城の名へ旧き筆文太也起ゆ。斯くり俺们
先年船止み。故がる非命よ。唐琴浦舟がす。龍次
郎。まく家隸書。數をつが。子子四秀。父兄の危とおぐる
爰よ。まく。遂りであづく。獨廻を坐せよ。鳥立ても。更ふ音よ
其するよ。借ハ風と。聲ひて。遂失し。やと屏風と。がん。退く。相手よ
吹き。夜風よ。船外へ。消く。まの間。繕そく用意や。さすげ。宋の

肉う。醜と白。白刃を引。種が通う。むろに。稚八子。四三箇見ゆ。す。
迷へ。せ下と。切つ。二太刀。三太刀。お合せ。所。途敵。一。二。三。四
ひり。縫を。見合。迷へ。とす。後。兄の歌。ひきまと。た。み。う。け
かつ。れ。あ。と玉消。一。變。す。そ。尽。其所。よ。倒。す。と。手。四
き。扇が。切ら。と。ま。る。を。変。う。け。く。ゆ。待。え。手。四。三。秀。ど。の。我。ま。と。言。ほ
御。市。お。ぎ。き。つ。折。一。も。雪。間。を。漏。玉。五。月。の。光。よ。面。を。刃。五。宣。耳
ら。と。哉。國。と。興。の。一。山。紫。あ。と。け。よ。大。ふ。聲。を。と。六
何。故。よ。山。紫。は。男。子。の。高。形。よ。お。幼。く。歌。と。名。の。俺。们。よ。あ。と。す。つ。六
和。ひ。ぞ。ま。や。一。是。よ。深。き。孩子。有。る。よ。う。い。迷。く。沿。つ。き。よ。七
左。右。う。取。つ。の。く。水。保。土。豆。小。第。最。苦。一。け。よ。二。箇。よ。向。の。最

前あの如くうの無を得うとまへせ。西二箇と海東あざむきたまば。
増一とす。因をまへがれぐうみの妻が命我支權へきみゆきよ
かうとたうがせらとの申次。一ト通り吹そきへきう。今日一と君の
妻が右の腕の癌をこじけ。自分の邊をもまくと刃せひひよ。渠も既
ふも同じ形の癌あるゆゑ。ひと不思議もがへたぐらに渠も既とあさ
ももをせす。國山と六世を安ぶ後の名寛が先年高階師直とせよ。
津の國武庫川は失ふ。鹿目平次左の子ふ。旧鳥籠文太と本
名をあう。妻とて是をすうより腕の癌みて分明ヨコアリシフヘテ。
豫と故と云ひ多とよすう。權へとからし。女年こそ我が先年

信州よなむらへ。わらう。子細あく。お景井。唐琴浦右のとひ
りの見事の者るま。我思ふ。生きて。窓覺易うらさる。ゆゑ
我の身。て。絆と。と言せ。ぐるゆゑ。妻仍うらま。弟契。休ふ
うそ。仕磨。渠をとだまつて。討をるべ。その代。舅が常。一
ろ刀と。その私。一の殻と。もがく。間。併て。まく。エヌニ。山を
おこう。て。二世と。う。母。ひと。げき。まく。お
り。も。裏。す。四。湯。ま。す。も。渠。と。お。く。娘。の。根。よ。ち。渠。と。枯。さ。と。言
ま。渠。せ。一。大。ま。い。は。渠。の。我。妹。う。と。お。き。ア。よ。稀。め。て。這。京
お。妻。よ。頃。け。飯。つ。て。す。お。哀。しき。妻。が。身。の。上。二。世。と。う。母。お。ひ。と。
お。見。と。御。う。い。実。の。足。も。く。お。見。お。娘。の。金。歌。う。ま。が。コ。ト。お。支。聲。

おらの身の處のよからず。兄への辦理と、まんとまへ。夫への操たず。
操と全ふせんとをまへ。是身の義理よ遠ふりゆも憂へしむまづ
く。武翁あがめかくるわゆや人の死ぬ存命ぐれん姿が命敵と名前
權八君の腹のなかりは刀と差しと通してまのせ。こまくとツの功と
きて兄と一ふくさだ抗拒は世の縁ひ薄くともあまへ同い蓮花
坐よ承きあの世の繁うとを。結びくわんまき權八君よ四壽歎ね。ま
共懶はばすとくみよ取次くよとりあをさす終くよ秋の暮るゝ由
の音のいと歎ちふ彼之ける後夜よ度々檜八ハ懇懃の泪よ泣せ
る。備ハ兩卒とりくも蓑文太わく実ハ小聲が兄あく有りけり。
兄は代て我より志感をよ眉とあり去つまがつまとまく

知るうべ。ちうかりうす有へきよ不便の者の身の果やと目をあべて
きは世の縁ハうすくも未來永劫うきらぬま。婦是をば世の恩ひ云
ふ清く成仏の挽せよ。実の親みあらずとす。初推うり育十。源
湯や袖助が波うべ。さぞうろげん我代後りうわど立外生母す
とも誓て本妻をやどすと言つて刀をと直。警とふ門と切
ちらひ爰うり冠追き驪山の逸月寺の僧侶ハ我本国信陽ま控
懲りのひ一物我と師オのちみとあきば這由と洋よ物語り。この
警と山茶うら死嚴共僧。彼の逸月寺へ葬つて。一つの塚みきびに比
翼塚と号け。あの世までも權八ひとり風流雄小紫と情死せしを
埋め放せし。塚うりどりひあらざる。世のあざけことをふせぐる理。又

ニツアハ皆老の契正をこやし。少弟生てハ室と同。死てハ穴と
共。もとも。藝ひよりまこと比翼塚の名を残。うばぬる方のゆく
いゆりふもみらん。す四圍うのみ斗らぶべーと岐く。首ハ焼
氣よ。只伏深むむる。今も尚好古の人。荆棘の林よ。貞歸。五
の誓。もとも。驪山よ。残る比翼塚の周縁。かとあらま。けり。とく
語。と傳へぬ。

梅花春水卷之二終

